

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 元年 6 月 13 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02008

研究課題名(和文) 中東の宗教的少数派問題と万教帰一運動 - バハーイー教とその日本との関係

研究課題名(英文) The Question of Religious Minority Groups in the Middle East and the Concordia Movement : The Relationship between Baha'i Movement and Japan

研究代表者

臼杵 陽 (Usuki, Akira)

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：40203525

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では中東の宗教的少数派バハーイー教とその日本との関係を、万教帰一運動をキーワードにして分析した。具体的には、日本女子大学の創設者成瀬仁蔵と東京帝国大学宗教学教授姉崎正治の活動に代表される日本の万教帰一運動に注目した。成瀬は帰一協会の代表として第一次大戦前にバハーイー教教主アブドル・バハーとロンドンで面会して、日本でも同教団との関係を維持しており、また作家・徳富蘆花も英委任統治下パレスチナのハイファで面談した記録を残している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、すべての宗教は一つに帰するという信念をもった万教帰一運動を、第一次世界大戦前の時期に焦点を当てて成瀬仁蔵やアブドル・バハーといった具体的事例をもって明らかにしたところに学術的な意義がある。第二次グローバル化の時代といわれる21世紀の現在、民族・宗教の間の相互不信がテロなどの暴力行為を通して高まっており、そのような相互不信を乗り越えるための具体的な事例を取り上げて、第一次グローバル化の時代といわれた19世紀末から第一次世界大戦までの時期に焦点を当てて、その意義を改めて検討したものである。

研究成果の概要(英文)：In this study, I analyze the relationship between Baha'i movement as a religious minority group in the Middle East and Japan based upon the keyword of Concordia movement. Especially, I focus upon the Concordia movement in Japan organized by Jinzo Naruse, the founder of Japan Women's University and Masaharu Anezaki, professor of religious study, the Imperial University of Tokyo. Naruse met Abdul Baha, the hierarch of Baha'i religious sect, in London and kept his relations with them in Japan. It is also reported that Roka Tokutomi, a writer, met Abdul Baha in Haifa in the British mandatory Palestine, too.

研究分野：パレスチナ/イスラエルを中心とする中東地域研究および近現代の中東イスラーム世界と日本との相互関係

キーワード：地域研究 日本・中東関係 少数派 バハーイー教 万教帰一

1. 研究開始当初の背景

本研究は、中東地域研究者としてその研究対象とするパレスチナ/イスラエルにあるユダヤ教、キリスト教、イスラームという三つの一神教の共通の聖地エルサレムへの日本人による巡礼を調査する過程であった。すなわち、日本人のキリスト者で最初に聖地巡礼を果たした一人が徳富蘆花(健次郎)であるが、日露戦争直後にパレスチナ訪問と同時に帰路ロシアに立ち寄り、文豪トルストイに面会することをその旅行の目的としていた(徳富健次郎『順礼紀行』1906年)。蘆花は晩年のトルストイはバハーイー教の絶対平和という考え方に傾倒しており、実際にバハーイー教関係者と書簡のやり取りも行っており、その巡礼を調査する過程で蘆花の残した文献に関心を持ったところから始まった。第一次世界大戦終了直後、蘆花は再度パレスチナを訪問してトルストイから紹介されたバハーイー教教主に面会して、その時も『日本から日本へ』としてその記録を残した。

2. 研究の目的

研究の目的として、以下のとおり5つの問題系を設定とした。

第1の問題系(国民国家におけるマイノリティ問題)は、中東地域における国民国家の形成とマイノリティ集団との関係の一般的特徴である。とりわけ、ユダヤ国家イスラエルにおいてバハーイー教が公式にどのように位置づけられて共存してきたかを検討する。と同時に、なぜバハーイー教が十二イマーム派イスラーム国家イランにおいて現在に至るまで迫害されているかを、オスマン朝末期からイスラエルに至る時期を対象にして対照的な事例として明らかにする。

第2の問題系(万教帰一思想)は、バハーイー教の帰一思想とイスラームの預言者論(スンナ派およびシーア派十二イマーム派)との教義上の比較であり、その作業を通じてバハーイー教における他宗教観を明らかにする。と同時に、バハーイー教の帰一思想の起源をも解明する。

第3の問題系(欧米でのバハーイー教の認識)は、バハーイー教が欧米においてどのように認識されてきたかを、欧米での研究史を追うことで解明することである。

第4の問題系(日本との関係)は、バハーイー教と日本の帰一運動との関係である。その分析を通じてバハーイー教の帰一思想とその運動と日本における帰一協会の思想と活動との共通性と差異性を解明する。すなわち、すべての宗教は一つに帰すると考える万教帰一をめざす宗教運動を国際比較の観点から検討する。

第5の問題系(日本人信徒の伝記的情報収集)は、バハーイー教に帰依した日本人の伝記的な情報収集である。このような日本人信徒の伝記的な情報収集を通して、バハーイー教と日本との接点を検討した。

3. 研究の方法

本研究は5つの問題系を当該年度において複数取り上げることで、年度ごとにその研究計画が実施された。5つの問題系のうち第1の問題系(国民国家におけるマイノリティ問題)は、本研究を貫く通奏低音ともいえるべき基調的問題関心であり、その他の問題系を年度ごとに問題系を組み合わせ実施した。

同時に、日本国内における万教帰一運動をバハーイー教のそれと比較するために、帰一協会の設立者の一人、宗教学者の姉崎正治・東京帝大教授の弟子でその影響を受けた大川周明の万教帰一思想の原点である山形県酒田市に毎年資料調査を実施した。

宗教的少数派としてのバハーイー教および日本との関係に関して、第1の問題系(国民国家におけるマイノリティ問題)、第2の問題系(万教帰一思想)、第3の問題系(欧米での認識)、第4の問題系(日本との関係)、第5の問題系(日本人信徒の伝記的情報収集)の5つの問題系を設定する。その際、バハーイー教を中東の宗教・宗派紛争の解決に向けて万教帰一をめざすモデルケースと捉え、21世紀というグローバル化時代の宗教のあり方、あるいは宗教的共存・共生のあり様を検討した。

4. 研究成果

本研究においては、5つの問題系の相互関係を解明した。すなわち、バハーイー教の軸においては、万教帰一思想、欧米でのバハーイー教の認識、日本の軸においては、日本との関係、日本人信徒の伝記的情報収集、という二つの軸に基づいて、主要課題である国民国家におけるマイノリティ問題を宗教との関係から明らかにした。すなわち、中東の宗教的少数派バハーイー教とその日本との関係を、その具体的事例として、日本女子大学の創設者成瀬仁蔵らの活動に代表される日本の万教帰一運動をキーワードにして分析した。すなわち、日本での宗教的帰一運動の代表的な存在である成瀬仁蔵や姉崎正治らの「帰一協会」を、バハーイー教との関係を視野に入れて、日本と中東という地域間の比較を行うことを目的とした。

さらに注目した人物としては、バハーイー教に関する著書のあるエドワード・G・ブラウン・

オックスフォード大学アラビア語教授(1862~1926年)および人種主義者として知られていたジョゼフ・アルテュール・ド・ゴビノー伯爵(1816~82年)である。ブラウンはバハーイー教関係の文献を収集し、イギリスにおいて最初にバハーイー教の教義を紹介したイスラーム研究者として著名であった。また、同教授は第一次世界大戦の際にはイギリス政府に対して戦争反対の声を挙げた数少ない反戦の抗議者の一人であった。また、ゴビノーはイラン駐在公使外交官として初期バハーイー教関連文献を最初に体系的に収集した者として知られる。この二人をバハーイー教研究の先駆けとして、バハーイー教の生まれたイランの文脈において歴史的に位置づけるための前提となる作業を行った。

さらに、バハーイー教に入信した日本に出自をもつ人物として、山口県柳井生まれでアメリカ移民の日系一世の藤田左次郎(1886~1976年)に注目し、藤田が米オークランドでバハーイー教に入信し、アブドゥル・バハー教主の側近としてハイファのバハーイー庭園の設計と管理に当たった経緯を調査した。

この分析を通じて、第二次グローバル化の時代といわれる21世紀の現在、民族・宗教の間の相互不信がテロなどの暴力行為を通して高まっており、そのような相互不信を乗り越えるための具体的な事例を取り上げて、第一次グローバル化の時代といわれた19世紀末から第一次世界大戦までの時期に焦点を当てて、その意義を改めて検討したものである。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 19 件)

Akira Usuki, "The First Japanese Catholic that Made a Pilgrimage to Jerusalem: A Case of Petro Kibe (1587-1639)", Hiroshi Kato and Liana Lomiento eds., *The Mediterranean as a Plaza: Japanese and Italian Insights on the Great Sea*, Rome: EPHEO – Euromediterranean Phenomena / Historical, Economic and Social Observatory, Cisalpino Istituto Editoriale Universitario, 2018, pp.97-112, 査読無

白杵 陽 「アラブ革命」再考: 「アラブの春」とオリエンタリズム的伝統」『歴史評論』第810号 2017年 56~67ページ 査読無

白杵 陽 「中東の語り部たち(最終回) 戦後知識人の中東(6) 加賀乙彦『殉教者』の聖地エルサレム」『究: ミネルヴァ通信』第86号 ミネルヴァ書房 2018年6月 40~43ページ 査読無

白杵 陽 「中東の語り部たち(47) 戦後知識人の中東(5) 加賀乙彦の描くガリラヤでのペトロ岐部」『究: ミネルヴァ通信』第86号 ミネルヴァ書房 2018年5月 40~43ページ 査読無

白杵 陽 「中東の語り部たち(46) 戦後知識人の中東(4) ペトロ岐部と加賀乙彦の信仰」『究: ミネルヴァ通信』第85号 ミネルヴァ書房 2018年4月 40~43ページ 査読無

白杵 陽 「中東の語り部たち(45) 戦後知識人の中東(3) 加賀乙彦『殉教者』に見るペトロ岐部」『究: ミネルヴァ通信』第84号、ミネルヴァ書房、2018年3月40~43ページ 査読無

白杵 陽 「中東の語り部たち(44) 戦後知識人の中東(2) 遠藤周作と「受難」」『究: ミネルヴァ通信』第83号 ミネルヴァ書房 2018年2月 40~43ページ 査読無

白杵 陽 「中東の語り部たち(43) 戦後知識人の中東観(1) 遠藤周作のエルサレム観」『究: ミネルヴァ通信』第82号 ミネルヴァ書房 2018年1月40~43ページ 査読無

白杵 陽 「中東の語り部たち(39) 戦前知識人の中東観(5) 中野好夫『アラビアのロレンス』」『究: ミネルヴァ通信』第78号 ミネルヴァ書房 2017年9月 40~43ページ 査読無

白杵 陽 「中東の語り部たち(38) 戦前知識人の中東観(4) 小林元とオックスフォード大学」『究: ミネルヴァ通信』第77号 ミネルヴァ書房 2017年8月 40-43ページ 査読無

白杵 陽 「中東の語り部たち(37) 戦前知識人の中東観(3) スレイマーン・ムーサーと小林元」『究: ミネルヴァ通信』第76号 ミネルヴァ書房 2017年7月 40~43ページ 査読無

白杵 陽 「中東の語り部たち(36) 戦前知識人の中東観(2) アンマン、チェルケス人、そして小林元の「アラビアのロレンス」」『究: ミネルヴァ通信』第75号 ミネルヴァ書房 2017年6月 40~43ページ 査読無

白杵 陽 「中東の語り部たち(35) 戦前知識人の中東観(1) 小林元『イギリスとロレンスとアラビア』を読む」『究: ミネルヴァ通信』第74号、ミネルヴァ書房 2017年5月 40~43ページ 査読無

白杵 陽 「中東の語り部たち(34) 日本帝国軍人の中東観(7) 四王天延孝とフリーメーソン」『究: ミネルヴァ通信』第73号 ミネルヴァ書房 2017年4月、40~43ページ 査読無

白杵 陽 「中東の語り部たち(33) 日本帝国軍人の中東観(6) 陸軍航空部門専門家・四

王天延孝」『究：ミネルヴァ通信』第72号 ミネルヴァ書房 2017年3月40～43ページ
査読無

白杵 陽「中東の語り部たち(32) 日本帝国軍人の中東観(5) 四王天延孝の反ユダヤ主義」
『究：ミネルヴァ通信』第71号 ミネルヴァ書房 2017年2月 40～43ページ 査読無

白杵 陽 「予測不可能のトランプ次期政権の登場に揺れる中東」 『現代思想』 第45
巻第1号, 204～209ページ 2017年1月 査読無

白杵 陽「中東の語り部たち(31) 日本帝国軍人の中東観(4) 安江仙弘の「幻のユダヤ人
国家」と満洲」『究：ミネルヴァ通信』第70号、ミネルヴァ書房、2017年1月 40～43
ページ 査読なし

白杵 陽 「不透明さを増す中東情勢 「緩衝国家」にも押し寄せる「イスラム主義化」の
波：ヨルダンジャーナリスト殺害事件の衝撃」『世界』第890号、2017年、232～239ペ
ージ、査読無

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 5 件)

白杵 陽『日本人にとってエルサレムとは何か 聖地巡礼の近現代史』ミネルヴァ書
房、2019年、390ページ

白杵 陽『日本人にとってエルサレムとは何か 聖地巡礼の近現代史』ミネルヴァ書
房、2018年、390ページ

白杵 陽『「中東」の世界史』作品社、2018年、302ページ

川田順造、白杵陽『ナショナル・アイデンティティを問い直す』山川出版社、2017年、
416ページ (385-405)

白杵 陽、鈴木啓之 編著『パレスチナを知るための60章』明石書店、2016年、394ペ
ージ

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www2.jwu.ac.jp/kgr/jpn/ResearcherInformation/ResearcherInformation.aspx?KYCD=00008208>

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。